

〔教育に関するエッセイ〕

## 私の教育実践

——「願い」を引き出す・形にする・開花させる——

松本 淳

### はじめに

小学校時代から仲の良かった友人が、大学の1年生が終わった春休みに「悩みがある」と言ってやってきた。「対人恐怖症で大学に行けない」と言う。1週間に亘り、彼は毎日やってきて、悩みを語った。学校の先生も親も彼に一生懸命勉強することを期待し、彼はそれをまじめに実行した。そんな努力が災いしてか、彼の得たものは一流大学現役合格と精神科への通院という2枚の切符であった。その頃の彼との付き合いを通して、「今の教育は何かが違うのではないか」と思うに至った。そして、「本当の教育・本来の教育を知りたい」と強く思った。それが私の教育探求の原点だった。

大学を出て、「教育のあるべき姿」を海外に求め、留学の相談・手続き・アフターケアをしている民間の会社に教育コンサルタントとして15年勤め、何度も海外の学校を訪問した。そこで日本の教育にはない多様な生徒に対応するシステムを知り、教育現場の柔軟さと、愛情あふれる教師たちに出会ってきた。留学のサポートを通して一人の中学・高校生に、5年から10年間くらい関わることも少なくなかった。生徒の家族の一員となるような人間関係を築きつつ、一人ひとりの生徒の人的成長を見守り、サポートしてきた。

大学の教員になってからは、20年近くに亘り、さまざまな教育実践を試みてきた。その歩みを振り返り、一緒に歩んでくれた学生たちに感謝しつつ、次なるステップを考えていきたいと思う。

### 世間と学校

私は、大学に来て世間と学校の価値観のズレを感じた。「成績」や「形良く納まること」は、一般社会ではそれほど重要視されているとは思えなかった。

一方、学校では「志」や「願い」や「ヴィジョン」を持っていないことに対してさほど問題視していないことを不思議に感じた。そこには、文化の溝があるようにも思えた。

当時、留学から帰って就職活動中だった大学4年生の長塚明子さんは、「日本の大学教育を考える」(『季刊教育法 119』1999年3月号)の中で、以下のよう述べている。

会社訪問をして就職の面接を受けてみて、初めて社会ではどういう人間が要求されているのかを知った。

「自分の意見を持っていて、それを表現できる人間」どこへ行っても、それが第一条件だった。

しかし、小学校から大学までそういうことを要求されることは少なかった。むしろ、組織の中の一人でいることに重点が置かれ、自分の意見を持つことよりも、先生や周りの考えに同調する方が「良い子」とされてきた。

### 「教育学・出会いのプログラム」を作る

私は、世間と学校の溝を埋めるために、学生たちが社会のフロントで活躍している人々に会う機会を作りたいと思った。社会人に接することで、学生はそのままに学び、人生を通して取り組みたいことを見つけ、さらに時代や社会に貢献できる心を育むことができるのではないか。こうした願いから、1997年より「教育学・出会いのプログラム」を企画・実施してきた。これを『私たちの出会いの記録 1998』(自家版 1999年11月)等にまとめた。

そのプログラムを作るに当たってヒントとなったものが2つある。1つは、私が海外教育コンサルタントとして働いていた時に、アメリカの高校の校長から「生徒が理科の時間に近くの研究所を訪ね、研究員のまなざしに学ぶ機会を設けている」という話

を聞いたことである。もう1つは、仏典の華嚴経の中で、文殊菩薩が善財童子に「53人の善知識に出会い、そこから人生を学んで来るように」と導いていることである。私も、文殊菩薩の教育メソッドに倣ってみたいと思ったのである。

1998年には、53の出会いのプログラムを作るには至らなかったが、46の出会いのプログラムを企画・実施し、延べ275人の学生が参加した。以下は、「教育学・出会いのプログラム」の例である。

#### <訪問プログラム>

幼稚園，保育園，小学校，養護学校，養護施設，少年院，警視庁少年課カウンセラー，新聞社教育担当記者，更生施設，インターナショナル幼稚園，タイの学校・教育機関，ベトナムの幼稚園・小中学校，カンボジアの大学・語学学校，他

#### <体験プログラム>

小学校ボランティア，児童クラブ研修，各種国際交流イベントのボランティア

#### <お話し会>

養護施設の保育士，小児科医，外交官，小学校校長，教育長，作曲家，海外ボランティア体験者他

その出会いを通して、学生たちの中から引き出された「願い・ヴィジョン」のうち2例を紹介する。

#### ○自分の往くべき方向性を見出した

1998年夏、神奈川県藤沢市にある児童クラブで研修させていただいた当時短大・初等教育学科1年の一人は、子どもたちが自然体験をすることに可能性を見出した。そして、「自分は将来、子どもたちに自然体験をさせられる教員になりたい」と思った。もし、田舎の小学校で先生になったら、都会の子どもを受け入れて自然体験をさせたい。もし、都会の小学校の先生になったら、子どもたちを田舎に連れて行って自然体験をさせたい。そのために、自然体験について勉強をしたいと考え、国内に自然体験について研究している先生がいるかを調べた。そして北海道教育大学釧路校にいらっしゃることを知り、その先生の下で卒論を書きたいと思い、編入試験を受けて進学していった。児童クラブでの子どもとの出会いが、彼女の中にあつた「願い」を引き出し、

彼女の進む道を大きく方向付けたのだった。（拙著『愛をもって新しい時代の扉を開く』壮神社 2016年3月参照）

#### ○自分自身と向き合い、後悔が引き出された

1998年2月、筑波大学附属桐が丘養護学校で上原一恵先生の音楽の授業を参観した学生たちは、授業において児童の気持ちをチューニングする（整える）ことの大切さを学んだ。上原先生は、子どもたちと共に、何のためにバンドを演奏するのか（目的）や、どういうことを達成したいか（目標）の確認をしていた。

子どもたちから出された目的は、「小学校の最後の記念にチャレンジしてみることに」だった。

目標は3つあった。

- (1) 一生懸命取り組むことの大切さを知る。
- (2) ぼくたちは、（障害があっても）バンドを作って一生懸命演奏している。作詞・作曲までできてしまった。だから、君たちだってできるよということを後輩に伝えたい。
- (3) 友情を大切にしたい。

これらのことを毎回、授業の前に確認していた。

そして、気持ちがチューニングされた状態でのバンドの演奏を聴いた学生の一人は、自分の本心に立ち返ることとなった。彼女の言葉を引用する。

私はずっと障害者をかわいそうだと思ってきた。障害者のドキュメント番組を見ると涙が出た。しかし、その涙は哀れに思う気持ちや同情する気持ちからだった。

私たちは音楽の授業を見学した。子どもたちが楽器の前に座り、エレクトーンに指を置いたりドラムのバチを持っているのを見て「えっ、本当に演奏できるんだろうか」と私は驚いた。

演奏が始まった。（中略）急に涙が出そうになった。でも、決して哀れんだり、同情したからではない。私は、彼らの溢れ出るほどのパワーに圧倒されたのだ。それは、生きる力のように思われた。急に自分が恥ずかしく思えた。私は、自分が五体満足に生まれてきて大学にも通わせてもらって何の不自由もなく生活してきた。それなのにそのことに感謝する訳でもなく、一日一日をただ漠然と生きてきた。毎日

を無駄にして生きてきた自分をひどく後悔した。(前掲『私たちの出会いの記録 1998』)

その後悔により、「1日1日をしっかりと生きていこう」との「願い」が引き出されたのだ。

「教育学・出会いのプログラム」は現在も続いているが、開催数は減っている。この背景には、最初にこのプログラムを作った20年前に比べて大学の夏休みや冬休みが短くなったこと、校務が忙しくなったこと等がある。また、「教育学・出会いのプログラム」は、私が企画を作り運営し、学生がそれに参加し、体験し、気付きを得ていくという構図になっているが、それだけではなく、さらにグレードアップした別のプログラムを開発することにエネルギーを注ぎたいと考えたこともある。

## アジア教育研修プログラム

「教育学・出会いのプログラム」は国内での企画ばかりではない。タイ、カンボジア、ベトナム等にも学生を連れて行って教育機関(学校やNGO)を訪問したり、電気も水道もない山岳民族の村での生活体験をしたりしてきた。タイの田舎を訪れると、何か懐かしさを感じる。「日本人が経済成長を追い求める中で忘れてしまった、人と人との絆や人と自然との絆がここにはある」。そう感じずにはいられない場面に何度も出くわす。そんな体験を学生たちにもと思い、1995年より「アジア教育研修プログラム」を企画・実施し、これまでに17回行ってきた。以下は、学生からの聞き取り、学生のレポート等から私がまとめたものである。

### <カルチャーショックを体験したい>

「カルチャーショックを体験したい」と言う学生がいた。彼女は、小学校でボランティアをしていた時に、フランスから来た男の子が、言葉が通じないことや、日本の文化に慣れないことから不適應を起こしている場面に遭遇した。しかし、どのように支援すればよいかわからず、困惑した。そして「自分が、全く言葉のわからないところで生活をするようになったら、どのようなことが思い通りにいかず大変なのか。どのような場面で不安に思うのか。また、それを乗り越えるためには、どのようなアクション

が必要なのか」等を、身をもって体験することで学びたいと思った。

私は彼女の気持ちを受けて、2009年に実施した「第15回アジア教育研修プログラム」を2つのプログラムに分けた。1つはタイの学校やNGOを訪問した後、カンボジアの大学を訪問するプログラム。そしてもう1つは、その学生だけのためにアレンジした特別プログラムである。最初の3日間は他のメンバーと一緒にタイのチェンマイの学校等を訪問し、4日目からは彼女が単独で山岳民族の村を訪ね、8日間ホームステイをして地元の小学校に通い、授業やその他の活動に参加したり見学したりするプログラムだった。

彼女が滞在したのは、チェンマイ郊外の山岳少数民族、リス族の部落、ノンケーム村である。この村は、過去に学生たちを連れて何度か訪問・滞在したことがあり、親しみがあつた。ホームステイ先は、小学校校長も務めたことがあるタンさんのお宅をお願いすることにした。タンさんは、ツアーガイドをしたこともあり、英語が話せる。緊急時には、チェンマイから日本人の現地コーディネーターがかけつけることになっていた。

### <心が通わない苦悩の4日間>

ノンケーム村に日本人一人で8日間滞在することになったこの学生は、タイ語は全く勉強したことがない。リス族の言葉であるリス語などはわかるはずもなかった。

最初の4日間は何をしたらいいかもわからず、孤独と不安の中にいた。周囲の人が気を遣ってくれることはわかるのだが、それが彼女にとっては「お客様」扱いされている感じで、居心地が悪かった。4日目からは、ノンケーム村の小学校にも通い始めた。しかし、子どもたちとも心を通わせることができなかった。彼女がタイ語の会話本を手に子どもに話しかけると、子どもたちは逃げてしまった。彼女は「日本に帰りたい」という思いでいっぱいになっていた。

### <心を通わせる>

そんな彼女に転機が訪れた。村での滞在の5日目に小学校2年生のクラスを訪問した時のことだった。クラス担任の先生が授業そっちのけで、彼女に授業の内容を説明しようとしてくれたのだ。英語が少し

わかる教育実習生も呼んできて、身振り・手振りと言語の英語で、必死になって彼女に授業内容を説明しようとした。そのやり取りがあまりに面白くて、彼女の中にあつた「帰りたい」という思いが一気に吹っ飛んでしまった。もう、ここからはすべてが楽しくなつた。

午後には、子どもたちと一緒に教室の清掃活動もした。バケツに汲んできた水を教室中に撒いて、汚れを水と一緒に外に出してしまうという大胆な清掃方法だった。子どもも彼女もびしょぬれになりながら清掃をした。彼女と子どもとの距離はぐっと近くなつた。

その日から夕方になると教育実習生と一緒に村のお寺に行くようになった。心が穏やかになり、この村にいることの幸福感で心が満たされていくのを感じた。

小学校の1年生と一緒にタイ語の「コー・カイ」（日本語の五十音にあたる）の勉強もした。それを機に、今までわからなかつたタイ語の文字がしっかり彼女の眼に文字として映るようになった。そして、英語を使わずに、タイ語でタイ文字の決まりを理解し、子どもたちと一緒にそのタイ文字を音読することにより、本当にクラスの一員になつたような体験をすることができた。

#### <伝えたい・わかりたいという思い>

ノンケム村に8日間滞在してみて、彼女は、コミュニケーションについて考えることが多くあつた。そして、日本にいる時はあまり人の目を見ないで、音声のみのやり取りをしていることに気付いた。

全く言葉の通じない世界に入り込み、相手のことを理解しようとした時、また自分の思いを伝えたい時、彼女は真剣に相手の目を見た。そして、自分の目を相手が見てくれることで、彼女は大きな安心感を得ることができた。言っていることがどんなにわからなくても、その声の響きや相手の表情、動きから何を言おうとしているのか、伝わってくるものがとても多かつた。

彼女がテーマとしていた「自分が、全く言葉のわからないところで生活することになったら、どのようなことが思い通りにいかず大変なのか。どのような場面で不安に思うのか。また、それを乗り越え

るためには、どのようなアクションが必要なのか」という課題に対する答えを、彼女はこの村での経験を通して得た。不便さや不安があつても、「自分が相手のことを知りたい・理解したい」と真剣に思い、そして「自分の思いを伝えたい」と心から願うことで、状況を急転換することができることがわかつた。

#### <大学時代だから出来る原体験>

「カルチャーショックを体験してみたい」という思いから、海外に行き、言葉も生活習慣も違い、知り合いもいない村で生活し、淋しさと不安から始まり、1つの出来事を契機として、村人と心を通わせ、その村が第二の故郷となっていく体験。それは、大学教育においては、成績があがる訳でも、単位になる訳でもない。しかし、このような体験が出来るのが大学時代なのだと思う。彼女は、その後の人生において困難な状況にも道を開く力となる貴重な「原体験」をしたのだ。

この原体験は、知識を詰め込む学問に勝るとも劣らぬ価値をもつと言えるのではないだろうか。一人の学生の素朴な疑問から、教員はその学生のオリジナルの学びの場を提供しサポートする。そんな学びが創造できるもっと自由な時間が、学生にも、それをサポートする教員にも必要ではないかと考える。

#### 「願い」を発掘する

私は学生たちの中にある「願い」を見出し、それを具現する支援が出来たら、こんなにうれしいことはないと感じている。「教育学・出会いのプログラム」や、卒業研究や、就職活動、また様々なプロジェクトを通して、自らの内にある「願い」を見出していった学生たちにはまっすぐなエネルギーがあつた。「願い」とは、その人の人生を大きく方向付けるエネルギーであり、その人の人生を支える中心軸ともなり得るものである。

学生たちの様々な「願い」に出会ってきた。幼稚園教諭を目指していたある学生は概略次のように語つた。「私は、母園に就職を希望している。自分が通つた幼稚園では、『好きなこと探し』をしていた。その環境の中で、私は音楽が好きだということがわかり、中学・高校時代は吹奏楽部に属した。思春期の気持ちが揺れ動く時期も、音楽が私を支えてくれ

た。私は音楽が好き、ということを目覚めさせてくださった幼稚園の先生にとっても感謝している。だから私は母園に恩返しをしたいし、私も子どもたちの好きなこと探しをしたい。」

もし、私がその幼稚園の園長で、彼女からこのように言われたとしたら、彼女の就職の希望を断れないと思った。仮に彼女の能力や技術に何らかの不足があったとしても、「それは就職してから補えばいい」と考えるだろう。それから数ヵ月後に彼女に出会った時に就職について聞くと、「内定をもらった」との返事が返ってきた。

その「願い」がなかなかわからない場合もある。もう15年くらい前のことであるが、一人の学生が授業の後に私のところに来て、「就職の書類を作成するのを手伝ってほしい」と言った。彼女はCA（客室乗務員）になりたいと思っていた。彼女の今いる地点から目指す地点までは、はるかな距離があった。

そもそもその当時は、航空業界は不況で人材の募集を数年間していなかった。他の会社を受けるたびに彼女はエントリーシートや履歴書を持ってきた。私は最初、彼女が就職活動において、「うまくいかなかった時に、落ち込みから早く立ち直る術を身に付けることが、就職活動を乗り切る鍵となるのかな」と思っていた。しかし、そうではなかった。

会社に受かったり、落ちたりしながら、約1年が過ぎた。ある時、彼女と就職の話をしている時に、彼女がポツリと言った。

「結局、私がしたいことは、人を喜ばせることだった。それをCAという仕事を通して、やってみたかった。」

彼女の心の底に、何かぶつかり、コツンと音がした感じだった。彼女が自分自身の「願い」を発掘した瞬間だった。「もし、CAをさせてもらえるのなら、最初の1年間は、トイレの掃除だけでもいい。」彼女の中に中心軸ができた。

それから、急に扉が開くようになった。面接の受け答えで、どんなドジなことを言っても、次の扉が開いた。履歴書のサイズを一人だけ間違えて出しても、そんなことは問題にならなかった。そして、約300倍の倍率の壁を超え、客室乗務員となり、結婚して産休をとるまでの約10年間、「人を喜ばすこと」

を胸に、日本の空を飛び続けた。

彼女と歩んだ1年間の経験を経て、「願い」の発掘が、人の人生にとっていかに大きなエネルギーとなるか、私自身が教えられた。

心の深いところから出てきた「願い」は大きなエネルギーを帯びているし、浅いところから出てきた「願い」はまだ輪郭がボンヤリしていて、時間の経過と共に劣化してしまう可能性もある。劣化してしまったら、また掘り下げる必要が出てくる。

## 社会と学生をつなげる

### <出会いが意識の覚醒を起こさせる>

2014年10月、後期の授業が始まった頃、一人の学生が「フィリピンに行ってきた」と言って、研究室にやってきた。彼女が海外に興味を持ったのは、小学校の時の担任の先生がカンボジアの子どもの話をしてくれたのがきっかけだった。そして大学に入って、不安もあったが、2年生の夏休みにフィリピンへのスタディツアーに参加したのだった。

彼女は、フィリピンの孤児院に2週間通い、近くの民家にホームステイをする体験もした。その家はとても貧しく、狭く、家族が寝るスペースも十分にはなかった。その家に2人の日本人が宿泊した。人と人が重なりあって寝るような状況だった。しかし、貧困の中にあっても、日本では感じたことのない家族の温かさを感じた。それは、彼女が人生の中で体験したことのない「つながりの感覚」だった。自分が知らなかった世界だった。「オランダの子どもは世界一幸せだと言われているけれども、フィリピンの子どもたちだって幸せだ。日本の子どもたちよりも幸せだと思う」と力を込めて言った。そして、自分が見てきたこと、感じたことを興奮の面持ちで話し続けた。その勢いは増すばかりであった。彼女の中で意識の覚醒が起こっていた。眠っていた「願い」が輝き始め、成すべきことの片鱗を見出した感じだった。

「自分は、保育士になるための勉強を、日本でぬくぬくと続けているだけでいいのだろうかと思う」と言った。「この世界の現状を日本の子どもたちに伝えたい!」との意志が立っていた。そして、卒論のテーマを「発展途上国から日本の子どもたちが学

ぶこと」とし、自分が発展途上国の中で見聞し、体験したことを、どのようにすれば子どもたちに伝えられるかを研究したいと語った。さらに、子どもたちには大人になった時にどういう社会を作りたいのかについて、ヴィジョンを描いてほしいと語った。

彼女の気持ちを受けて、私は彼女に企画書を書くように提案した。自分が子どもたちに何を伝えたいのか、どのくらいの時間で伝えたいのか、どのようにして伝えたいのか等を書かせて、この学生が小学生たちに話が出来るチャンスを作りたいと思った。そして、昭和女子大学附属昭和小学校6年生の3つのクラスで、これが実現した。

2016年11月7日には6年3組で「共存」をテーマに、11月8日には6年2組で「医療」をテーマに、11月9日には6年1組で、「平和」をテーマに話をさせていただいた。指定されたテーマに合わせて、話を変えていくのは大変だったが、子どもたちに話をするのは彼女自身が望んだことであり、後に引くことはできなかった。また、本学の卒業生の協力を得て、板橋区の小学校3年生の2つのクラスで、子どもたちに話をさせていただく機会が実現した。子どもたちからはその都度フィードバックをもらった。彼女は、幼児教育コース（幼稚園・保育園の先生になる資格を得るコース）にいたので、小学校の指導案など書いたことがない。話をする原稿も作らない。メモすら用意しない。写真を入れたスライドを用意するだけである。私は、「それで大丈夫なのか」と心配をしたが、子どもたちの前に立つと、子どもたち一人ひとりの目を見て、子どもたちの反応に合わせてながら、話を展開していく。型にはまらないタイプの学生だった。

#### <私と社会をつないでくれたモーエン先生>

私は、大学教員ができることの1つは、「学生と社会をつなぐこと」であり、具体的には「お願いすること」「(場合によっては)お詫びすること」「お礼を申しあげること」だと思っている。

それは私自身が、1979年から1980年にアメリカのEisenhower Collegeにいた時に、アドバイザーであったモーエン博士(Dr. John V. Moen)にお世話になった体験に基づくものである。日本とアメリカの教育の比較を行っていた私は、地元NY州セ

ネカフォールズ(Seneca Falls)にある幼稚園、小学校、中学校、高等学校を3日間ずつ訪問し、生徒の立場でアメリカの教育を考察するプロジェクトを計画し、許可を願い出た。それを受けて、モーエン博士は、地元の教育委員会に連絡を取り、私の学校訪問の許可を得て、私を学校に連れて行き、先生方の前で私のプロジェクトの説明をしてくださり、スクールバスで子どもたちと一緒に学校に通えるようにアレンジしてくれた。3週間に亘り、毎日のように学校に通い、子どもたちと過ごし、様々な発見や気付きの連続にワクワクした時間を過ごした。学校訪問から帰るやいなや、モーエン先生の研究室に飛んでいき、その日、見たこと、聞いたこと、感じたことを夢中になって話した。3週間の学校訪問を終えると、約2週間、朝起きてから夜寝るまで、英語で論文を作成した。そして、英文28ページにまとめた論文は、各学校に配られ、給食のおばさんから「読んだわよ」と言われた。

その体験は、その後、私が海外教育コンサルタントとしてアメリカやヨーロッパの学校調査に行く時でも、また大学の教員になって授業をする時でも、私を支える「原体験」となっている。

モーエン先生は、私と社会をつないでくださった。同じように、私も可能な限り、学生たちを社会とつないでいきたいと思う。

#### <子どもたちと向き合う>

その後、彼女はフィリピンに3回行った。ゴミの山や中国人墓地で生活する子どもたちにも会った。スリランカにも2回行った。電気も水道もない村でホームステイをしながら、村人と共に井戸掘りや道路工事に従事した。紙を使わないトイレには、なかなか慣れなかった。川や湖が彼女のお風呂だった。ワニがいないことを確認して水に入り、身体を洗った。水は、濁っていて決して清潔ではなかった。電気が通っていないので、夕暮れになると真っ暗になった。蠟燭に火を灯し、生活した。言葉がわからなくても、相手の目をしっかりと見て、身振り、手振りで真剣に気持ちを伝えようとした。悲しい、うれしい等の気持ちが伝わってきて、気持ちが通じあった。言葉は必要なかった。「自分は、日本にいた時にどれほど相手のことを知ろうとしてきただろうか、

どれほど真剣に人とコミュニケーションを取ろうとしてきただろう」と、自分自身に問いかけた。

その井戸掘りのスタディツアーに参加した仲間たちは、必ずしも志を持って来ている若者ばかりではなかった。不良や、引きこもりの若者もいた。しかし、スリランカの田舎で村人たちと交流し、一緒に汗を流すことで、2週間後にはみんな笑顔になっていた。一番気持ちが荒れていた若者は、村一番の人気者になっていた。電気も水道もない、文明社会から離れた村の人たちに何かをしたいと思ってやってきた若者たちは、文明社会の中で忘れていた人との出会いの楽しさを知り、まごころに触れた。2週間しか滞在しなかったにもかかわらず、村を去る3日前からホームステイ先のおかあさんは、別れるのが淋しくて泣いていた。帰国の途につき、隣町に移動した際には、村人たちは貧しいにもかかわらず、みんなでお金を出しあいトラックを1台チャーターして見送りに来てくれた。人と人との出会いは奇跡なのだということを知った。

これらの体験を彼女は子どもたちに語った。そして、子どもたちに、「私たちは人としっかり向き合っているだろうか」と問いかけた。「テレビを観ながら親と会話していないだろうか、スマホをいじりながら友だちと話をしていないか、隣に住む人のことをどれだけ知っているだろうか…」と。先ほどまで、はしゃいでいた子どもたちの中からは、「やばい」「まずい」という声も聞かれた。それは、年代を超え、同じ時代に日本に住む者としての生き方を問う時間でもあった。

#### <出会いが人生を方向付ける>

彼女の小学校時代の一人の先生との出会いが、彼女の目を世界に向けさせ、学生時代に発展途上国に何度も行かせ、「幸せとは何か」を考えさせ、「人と人との出会いの楽しさ」を体験させた。そして、その体験を約200人の小学生たちに真剣に語った。それを聞いた子どもたちの中から、「大きくなったら世界に出て、何かをしよう」と考える子も1人や2人は出てくるかもしれない。

卒業後にアフリカのブルキナファソに2年間、青年海外協力隊員として行くことになった。現地の「幼稚園教育の改善」が彼女の任務として与えられ

ている。そこで、見たこと、聞いたこと、奮闘したことを帰国後に日本の子どもたちに話したいと願っている。

彼女が「人生の中で果たすべき仕事」は、これからの様々な出会いや体験を通して、その輪郭がより明確になってくるのだろうと思っている。

#### 「心と身体と現実のつながり」を知る

私が授業を通して学生たちと共に約10年間に亘り探求してきた事柄の1つに「心と身体と現実のつながりを知り、気持ちを転換し、新しい人生の物語を創る」試みがある。

その手がかりとして、2005年より武道家の米山俊光氏の協力により、「心と身体と現実のつながりを知る」体験を授業の中に入れてきた。

米山氏は、武道家であるが20年間警察官として働いてきた経験がある。事件現場に出かけて行った際に、自分の気持ちが整っていると、犯人がまるで「捕まえてください」と言うかのごとく事件は解決し、自分の気持ちが乱れていると命を落としそうになったことが何度もあったという。自分の気持ちと事件現場とが、何か関係があるのかと思い、どういう気持ちで出かけていったら、どういう変化が生じるのか、その因果関係を20年間に亘り実験・研究した。その成果は武術の型をふまえた心体技法しんたいぎほうとして結実した。

心体技法により、「心の状態が現実はどう影響を与えているか」を、身体を通して体験することができるのである。

イライラした気持ちと、やさしい気持ちとでは、相手の体を持ち上げた時の重さが違う。学生たちは、二人でペアになり、持ち上げる方がイライラしたり、持ち上げられる方がイライラしたり、持ち上げる方がやさしい気持ちになったり、持ち上げられる方がやさしい気持ちになったりして重さの違いを体感する。

そして、相手（持ち上げられる側）がどんなにイライラしていたとしても、持ち上げる側がやさしい気持ちで関わり、相手のイライラが保てなくなってしまう体験もする。

授業の詳細に関しては、拙著『愛をもって新しい時代の扉を開く』をご覧ください。心体技法の

たくさんのメニューの中から、教職に就く学生にとって有効と思われる項目から5つ（「介護」、「持ち上げ」、「愛は勝つ」、「可動域」、「〈教えてあげる〉感覚と〈一緒に学ぼう〉感覚」）を選んで、90分の授業の中に納まるようにまとめたものである。

授業を行う側が、なるべく整った気持ちの状態です。授業の場に臨めるように、必ず毎回、授業の約1週間前には米山氏と打ち合わせを行い、計画書を作り、気持ちのチューニングを行う。そして、授業の1週間後には、共に振り返りの時間を設けるようにしてきた。この授業を通して、私自身も、学生たちとの数々の忘れることの出来ない出会いを体験することになった。

ある授業で、前方の椅子に斜めに座り、「いつでも教室を出て行くぞ」という雰囲気の子がいた。気持ちがトゲトゲしている感じだった。私は授業の度に、その子と関わりを持つようにし、彼女の気持ちは徐々に和らいでいったものの、まだその刺々しさが抜けきってはいなかった。学期の最後の方で、心体技法の体験授業を行った。その際に彼女が書いた感想シートを私は忘れることができない。そこには、「これまでの自分の生き方や想いで、世界をいかに汚してきてしまったか」という後悔が切々と綴られていた。さらに「気持ちを整えて生き直したい」という、未来への希望と喜びが記されていた。短い感想シートの中に、深い後悔と、希望の両方がある文章が記されていた。私は「人はこれ程、変わることができるのか」と思った。

また、ある学生は少人数での授業の際、心体技法の体験授業の最中に、母親との人間関係のねじれを語った。彼女の中に積年の恨み辛みがあった。しかし、やさしい気持ちで相手に関わることで、どう相手（現実）が変化するかを体験するうちに母親に抱いていた感情に少しずつ変化が生じた。そしてその後、約2ヵ月間でそのねじれは完全にほぐれていき、母親への「恨み」は「感謝」へと変わっていったのであった。

「自分の気持ちと現実をつないで物事をみる感覚」を知ったある学生は、教員になってからもそれを活かしている。小学校の1年生の担任になった卒業生は、子どもたちがザワザワしているのを見て、「自

分の気持ちはどうか」と振り返ってみた。すると、自分の気持ちもザワザワしていることに気付いた。そこで、職員室を出る前に、意識的に呼吸を整え、心を落ち着かせ、ゆったりとした気持ちになり、子どもたちに対して愛情を寄せ、そのうえで教室に向かってみた。すると、子どもたちは何も言わないのに、静かに勉強を始めたという。

彼女は、「子どもたちに『あしなさい。こうしなさい』と言うよりも、自分の気持ちを整えた方がはるかに効率がよい」と話してくれた。

この授業は、私の授業でしか行っていないものであり、日本でも世界でも、まだ前例がない。それを体系化して、1つの教育のメソッドとして人々のお役に立てるようにしたいと思っている。

### カンボジアにおけるロイ・レスミー先生の実践

大学教員の教育実践について考える時に、カンボジア王立プノンペン大学、日本語学科長のロイ・レスミー（Loch Leaksmy）先生には大いに学ぶところがある。

ロイ・レスミー先生は、2003年－2005年に昭和女子大学大学院修士課程に学び、修士号を取得し、帰国して同大学に日本語学科を設立し、同学科の学科長になった。（王立プノンペン大学はカンボジアの国立大学の中で唯一日本語学科を設けている大学であり、2017年時点での同学科の在籍数は560人である。）

その後、日本にネットワークを作り、10年後には、毎年約100名の教え子を日本に留学させるに至っている。その具現の力は、他に類を見ない。しかも、来日の際には、忙しくても時間を作り留学生一人ひとりに会い、「何か困っていることはないか」を聴き、「留学システムに改善する点があるか」を確認している。2017年1月から2月にかけて約3週間来日した際にも留学生約100人に会ったという。「それは、送り出した者の責任だ」とレスミー先生は言う。

人間関係を作って、受け入れ先を広げていくことの出来る人はいるかもしれないが、送り出した一人ひとりが困っていないか、しっかりやっているかを見て歩き、母親のように愛情をかけて関わり続けることの出来るのがレスミー先生だ。

2016年12月にカンボジアの国会議員が来日するに当たって、レスミー先生はカンボジア大使館からの通訳を依頼された。忙しい時期ではあったが、「お役に立てれば」と来日した。また、日本の国会議員がカンボジアを訪問した際にも、打ち合わせの場に同席した。

2016年度にカンボジアから昭和女子大学に留学している学生が、「使っていた携帯が壊れてしまったので、カンボジアから携帯電話を買ってきてほしい」と頼まれると、「わかりました」と、来日した際にカンボジアからその学生のために携帯電話を持ってきた。

大使館からの依頼であっても、一人の学生からの相談や依頼であっても、同じように誠実に応えていくことで、信頼関係を築いていく。それがレスミー先生流のやり方だ。

レスミー先生は、常に学生の20年後を見ているという。単に日本語を学び、マスターし、仕事に役立てるという域を超えて、「日本語を学ぶことを通して、日本とASEANの接点を作り、アジアの若者たちが一緒に新しい世界を創っていくこと」を模索している。それは、日本語学科長としての範疇をはるかに超えた視点であると思う。

レスミー先生はNGOを立ち上げ、2016年12月よりカンボジアの4つの高校で土曜日の午後に日本語の学習プログラムを始めた。当初、300人程度の高校生の参加を見込んでいたが、1200人の高校生が受講を希望し、大きなプロジェクトとなった。そこに王立プノンペン大学日本語学科の学生30名が、「日本語の先生」として派遣されている。

このプログラムには、いくつもの教育的意味が含まれている。日本語を学ぶ高校生たちにとっては、その後、王立プノンペン大学日本語学科等に進学して日本語の学習をしていく可能性を開くこと。あるいは、日本に留学する可能性を開くこと。そして、日本語を教える王立プノンペン大学の日本語学科の学生たちにとっては、自分が卒業した高校や、育った地域で自分の知識を活かして、貢献することが出来ること等である。

「大学の中で、授業中に意欲がなさそうに思えた学生が、高校生の前で生き生きと日本語を教えてい

る」とレスミー先生は笑顔で話す。高校生たちに教える立場になることによって、その学生の意欲が引き出されてきたのだ。

レスミー先生の「日本とカンボジアとの人的交流に関する貢献」は高く評価され、2016年8月には岸田外務大臣より表彰状が贈られた。

## 「願い」の具現に向けて

### <「願い」具現のための3つの要素>

私は、効率が重視され、数値化される尺度で人間の価値が測られ、人間がモノ化されていくような風潮がだんだん強くなっていく時代の中であって、自分が今まで作ってきたプログラムや、それを体験して変わっていった学生たちを見て、新しい時代を創っていく人材の育成には、以下のような要素が必要であると思うに至った。

### 「願いを引き出す」ための環境を整える

様々に変化し、揺れ動く環境の変化に対して、怠惰に陥ることなく、有頂天になることなく、迷うことなく道を進むための中心軸となる「願い」を持つこと。その中には、自分がどういう社会を作りたいのか、どのように生きたいのかという「ヴィジョンを描く」ことも含まれている。「願い」が心の浅い部分から出てきたのか、深い部分から出てきたのかによって、エネルギーの強さが違う。心の底の深いところから出てきた「願い」は、マグマのような熱いエネルギーを帯びている。

### 「願いを形にする」ために気持ちのチューニング（整えること）を学ぶ

チューニングには、2つの意味があるように感じている。1つ目は、「願い」を抱いても、環境から受ける影響や時間の経過により、元々の願いがズレてしまった時に、そのズレを修正するチューニング。2つ目は、「願い」を具現していくために、自分の気持ちや人間関係を含めた環境のチューニングである。たとえば、「めげない」「くじけない」「まごごろをもつ」「愛情をもつ」「相手を大切に思う」「謙虚さを忘れない」「感謝を忘れない」等である。

### 「願いを形にする」ための技術や知識を身に付ける

「願い」があって、気持ちが整っていても、それを形にするための知識や技術がなければ、「願い」

を具現することはできない。しかし、「願い」があいまいだと、知識や技術があっても、何を具現したいのかわからないので、あいまいなものしか具現できない。

これらを図にすると、以下のようになる。

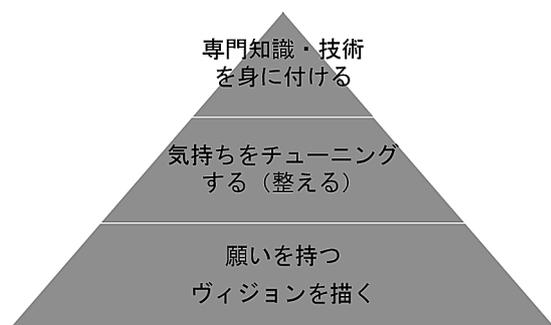


図1 「願い」具現のための3要素

上記の「『願い』具現のための3要素」を考えた時に、私が今までエネルギーを注いで来たことは、図1の三角形の土台の部分であることに気が付いた。

「教育学・出会いのプログラム」や、学生たちと社会をつなぐことや、体験プログラムを作ること、また就職活動の支援、これらすべては、「願い」の発掘や、ぼんやりとしていた「願い」の輪郭を明確にすることを、あるいは「願い」の片鱗を見出すことを目指していたことがわかった。

武道家の米山俊光氏の協力を得て、10年以上に亘って大学の授業で行ってきた体験授業は、ステップ1で「心と身体と現実とのつながり」を知り、ステップ2で「やさしい気持ち」や「愛情」をもって生きてみることに挑戦し、現実(相手)がどう変わるかを実験してきたが、これは三角形の真ん中の気持ちのチューニング(整える)を学ぶセッションだった。

自らの教育実践を振り返り、様々な人と話をする中で、「願い」を形にするための技術力や知識として、三角形の上の「専門知識・技術」の部分は欠かせないことを実感した。いままで、自分の中で別々に感じていた「願いを持つ。ヴィジョンを描く」「気持ちをチューニングする」「専門知識・技術を身に付ける」が1つの三角形にまとまって、ひとつつながりになった。

レスミー先生のしてきたことを見ると、「願い・ヴィジョン」もあり、「チューニングすること」も

出来、「専門知識・技術も身に付けている」ことで、「具現の力」が発揮されていることがわかる。

AI (Artificial Intelligence: 人工知能) は専門知識や技術において、かつてなかったようなすばらしい成果をもたらすかもしれないが、その土台となる「願いを持つ。ヴィジョンを描く」「気持ちをチューニングする」は担えない。それは、人間が担う部分である。

最初から「願い・ヴィジョン」がはっきりと見えている場合もあるし、最初はボンヤリとしていて、徐々に輪郭がはっきりとしてくる場合もある。また、一旦描いた「願い・ヴィジョン」が深化してくる場合もある。人は、それぞれ固有の「願い」がある。そして、「願い」の方向に生きていくとエネルギーが出てくる。しかし、「願い」を発掘するまでの「生みの苦しみ」もある。また、その発掘のプロセスにおいては、紆余曲折することもある。

#### <私自身の願い>

私自身、「人の中から願いを引き出したい」という思いがあったものの、自分の気持ちをチューニングすることが出来ずに、身体を壊して2年近く休職したことがあった。休職中に友人から、「まだ治るには決定的に足りないものがある。それは気付きた。まだ、松本には気付かない」と言われた。復職後もエネルギーは低迷していた。

最近になって、ようやく気付いたことがある。それは、「自分の中でたくさん大切にしたいことがあっても1つだけを選んで、あとは捨てるとしたら何を選ぶか」という問いから始まった。それがわからなくて、迷走状態にもあった。そして、私の出した答えは、「人の中から可能性を引き出して、開花させていく」ということであった。「寿命が尽きて、この世界を去るその瞬間までこれを続けさせてください」と天に祈った。場所は、会社という枠の中であっても、学校であってもいいのかもしれない。今は、大学にいるのだから、学生たちの中から可能性を引き出していきたいと思った。私は身体を壊すことで、図1の構造を見直すことができた。そして、土台の部分の「願い」が明確になってきた。すると体調も急に回復してきた。

成績の良い学生も、成績の悪い学生も、まじめな

学生も、いい加減な学生も、一生懸命な学生も、怠け者の学生も、おおらかな学生も、気の小さい学生も、すばしっこい学生も、のろまな学生も、すべての学生の、内に輝く可能性を引き出したいと思った。

出会う学生の中にどんな可能性が眠っているだろうかと思うと、それを知りたくなる。その可能性は、引き出されるその時を待っているようにも感じる。これまでも、何度もその瞬間に立ち会い、その輝きに瞠目させられてきた。それぞれの個性の異なる輝きが響きあってオーケストラのように音を奏でることが出来たらどんなに美しいだろうかと思う。

### <訪れた変化>

この原稿を書く中で、私自身に変化が訪れた。人を見ると、どんな願いを持っているのか、どんなことに関心があるのか、どんなことに喜びを感じるのか、どんな可能性があるのかを知りたくなり、人と関わりたくなるのである。それが認識できた時、学生との関係にも変化が生じてきた。

たとえば、私が担当する IT 機器の操作を学ぶ授業では、これまでは早く正確にパソコンが使えるようになることが目的だと思っていた。学生はそれぞれがパソコンに向き合って課題に取り組んでいるので、気持ちの交流が起こる授業ではないと思っていた。しかし私は、その時、図 1 の上の部分しか見ていなかったことに気が付いた。そして、「一人ひとりの可能性を見出し、それを開花させていきたい。そのために今、自分はここにいる」と考えると、授業での関わりも変わってきた。

授業中にある学生が、「わからない」と言う。(一瞬、「わからない」という状況の可能性を考える) その学生に「将来、何になりたいのか」と聞くと、「学校の先生になりたい」と言う。そこで、「『わからない』ということはすばらしいことじゃないか。わかる人は、わからない子どもの気持ちを理解することが難しい。わからないことを経験した人が先生になったら、わからない子どもの気持ちがわかるし、わからない子どもの味方になれるじゃないか。それはすばらしいことだ」と話した。

しばらくすると、また同じ子が、「パソコンが出来なくてイライラする」という。私は、すかさず、「そのイライラする気持ちが大切なんだ。この時間

は、イライラする回数をどうやったら減らせるかを試してみる絶好の機会になるじゃないか」と言う。

他の学生が、「この課題提出のコメント欄には何を書けばいいのですか?」と聞くので、「そこには、『愛情を込めて作成しました』とか、『まごころを込めて作りました』と書くんだ」と答える。そういうやり取りをしているうちに、だんだん空気がなごんで来て、エネルギーに満たされたような場となり、私の身体も軽くなってきた。

ところが、同じ科目でも、受講する学生が違えば授業の雰囲気も変わる。あるクラスでは、学生たちはパソコンに向かってモクモクと演習問題に取り組んでいる。シーンとしている。こちらが何かを言う隙間はない。一生懸命に取り組んでいるのだから、それは悪いことではない。しかし、授業後に私はどっと疲れを感じた。気持ちのエネルギー交流があるかないかで、疲労度は全く違って感じるということを知った出来事だった。

「わからない」「イライラする」と言っていた学生は、その後「今日のご機嫌は?」と聞くと、「機嫌いいです!」と笑顔で答えるようになった。

これから「学生の可能性を開く」ことを探求し続けた先に、どのような新しい物語が生まれて来るのだろう。それは今度、またいつかご報告したい。

### 参考文献

- 大角修『善財童子の旅』春秋社 2014年  
松本淳『愛をもって新しい時代の扉を開く』壮神社 2016年  
高橋佳子『運命の逆転』三宝出版 2016年  
松本淳「創立者の願いの具現へ向けた授業の試み」『学苑』844号 昭和女子大学近代文化研究所 2011年2月  
・タイの日本語新聞 CHAO156 2009年10月10日  
・タイの日本語新聞 CHAO158 2009年11月10日  
DVD 米山俊光「昭和女子大学松本淳准教授インタビュー」『現実対応型格闘術』クエスト 2016年9月

(まつもと じゅん 初等教育学科)